第35回「全日本中学生水の作文コンクール」熊本県最優秀賞「水の作文大賞」受賞作品

「人と自然と水の関係」

高森東中学校　三年　芹口　美那さん

8月1日～7日の「水の週間」にあわせ、「第35回全日本中学生水の作文コンクール」が開催されました。厳正な審査の結果、高森東中学校三年の芹口美那さん（大字芹口）が、熊本県の地方審査で最優秀賞の「水の作文大賞」を受賞し、7月28日に授賞式が行われました。

「ゲコッ、ゲコッ」と蛙が鳴いています。田植えの季節になると蛙がでてきて大合唱をはじめます。その声を聞くと、もうすぐ梅雨になってあっという間に夏になるんだろうなと思います。

私の住んでいる地区は周りを豊かな自然に囲まれています。私は棚田のある所を散歩していました。棚田には水が張ってありました。ちょうど夕方で棚田に夕焼けが映っており、周り一帯がオレンジ色のような、赤色のような色に優しく包みこまれました。棚田は空を映しだす鏡のようだなと思いました。夏になると棚田は鮮やかな緑色をした苗に埋めつくされます。その上を吹く風は涼しく、気持ちがいいです。すがすがしい気持ちになります。秋は、黄金に輝く棚田が見られます。黄金色の棚田の上を赤とんぼが飛びます。私の住む地区のお米はとてもおいしいです。こんな体験ができるのも、きれいな水があるからだと思います。

この水は、自然の力だけで私たちの地区に与えられているのではありません。私たちの地区には「白水路（はくすいろ）」というものがあります。昔、この地区は畑作地帯で、水田が少なく貧しい農家が多かったそうです。そのため「後藤廣太」さんという人が水路を作られたと聞きました。私たちの先祖は、自然に手を加え調和しながら、里山の自然を守ってきました。

二〇一二年、七月十二日に九州北部豪雨が阿蘇を襲いました。阿蘇市内にある私の母の実家も被害にあいました。十二日の朝、祖母から電話がありました。母と父と私で祖母達に会いにいきました。避難所にはたくさんの人がいました。みんな驚きをかくせない様子でした。テレビのニュースを見ると「経験したことのない大雨」と表示されていました。二、三日たって現場が落ち着いたのを確認し、実家に行ってみました。いつも遊びに来ていた家はそこにはありませんでした。裏山から大きな石や杉の大木が流されていました。冷蔵庫やテレビなど、見慣れたものが土砂に埋まっていました。思い出の写真などもそこにありました。私はショックで言葉になりませんでした。目の前にある光景が信じられませんでした。危険なので近くに寄れませんでした。私は、水の怖さをあらためて知りました。

根の張りが弱い杉を急斜地に植林した事により、長時間続いた雨の水分を保持できずに土砂崩れが起きたのではと言われています。祖母の家の跡にも大量の杉と土砂が流れてきていました。また、地球温暖化の影響で海水が温められた大量の水蒸気をふくむ「湿舌（しつぜつ）」という現象が起こり、阿蘇地方に大量の雨雲が長時間にわたり流れ込み続け、水害になったという報道があったのを覚えています。祖母も一晩中、大量の雨が降り続いていたと話していました。避難する時も道路が川のようだったし、稲光で明るかったと言っていました。水は私たちの生活に恵みだけでなく、大きな災いをもたらすものであることに気付かされました。

水は、私たちの生活に必要なものです。きれいな水を作るのには自然が大切です。その自然を守るためには、人が守る必要があります。けれど、手を加えすぎてもいけません。逆に、手を加えすぎないのもいけません。自然と人間との「調和」が大切だと思います。私の住んでいる所は、その調和のとれたすばらしい里山です。でも、母のふるさとも同じようなきれいな水が流れ、ホタルの飛び交うすばらしい里山でした。でも少しのバランスがこわれ、大きな災害をもたらしました。私たち人間は、自然を大切にし、自然のバランスを保っていくことを忘れないようにしなければなりません。身近なところから、また地球規模で、そのことを考えていきたいと思います。